

お見舞いとお礼と決意と

三輪 泰司

兵庫県南部地震による未曾有の阪神大震災で被害を受けられました皆様に、心からお見舞い申し上げます。併せて、早速に全国の皆様、イタリア・ブラジルからも丁寧なお見舞いを頂き、厚くお礼申し上げます。

阪神方面に居住する弊社社員9名が被災し、家屋什器が損壊しましたが、幸い本人と家族は全て無事でした。

被災地の県市町はじめ、国の関係機関、第三セクターや企業の皆様の献身的なご奮闘に深く感動致しております。

現地の状況は、臭いや風、歪んだ路面など、写真やテレビでは、現しつくせないものがたくさんあります。初期の救援から避難生活へ、そして生活再建へと局面は進展しています。

私どもも、非力ながら、全社挙げてご奉仕に参加させて頂いています。被災社員の戦列復帰支援の互助活動から、JIA-新日本建築家協会を通じての要請に応じて建築物危険度判定、再開発コーディネーター協会を通じて建設省と神戸市等からの要請に応じて都市復興計画等へと拡げてきています。

新年のご挨拶で「激動の時代」に「予想外のもっと劇的な変化」を予測し、このような時代に“ボランティア”が大きな意義と役割を担うことが判ってきましたと申しておりましたが、かような形で、かように早く遭遇するとは、痛恨の極みです。

1982年10月に、神戸市のお世話で、都市問題会議・関西会議を設立し、以来神戸市・大阪市・京都市の三都市の皆さんと議論を重ねて12年になります。昨年2月10日の第64回例会のテーマは、大阪市の磯村助役のご提起で「大都市の危機管理」でした。島原市の鐘ヶ

江前市長をお招きして三都市で議論しておりました。昨年の秋から事務局を神戸へタッチしたばかりでしたが、大阪・京都のサブ事務局で支援させていただきます。

日本的都市計画の発想・通念-パラダイムの転換が言われて久しいものがあります。

成長管理への転換-都市政策や計画は、経済成長志向を目的化してしまっていなかったか、ソフト化への転換-都市計画をハードな固定資本形成に埋没させていなかったか、そして住民主体への転換-地域住民の主体的な参加を基礎とする地方分権も、日本異質論で喧しい国際的批判の中で、今や現実的な課題でした。国の法制や予算もさることながら、各都市で用途地域や街路断面などの決め方はこれでよかったのか、地域計画の職能に関わる者として、深刻に反省致しております。

転換の底流として、地区計画が浸透してきておりました。助け合いの心、自助の意志、奉仕の精神で、真のコミュニティを創り出した市民が、直面する再建計画へ立ち上がることを念ずるとともに、この災いを全国の都市計画思想と方法の大転換の機としなければ、5千余名の犠牲者に申し訳が立たないと思っております。

神戸市・西宮市・芦屋市・宝塚市・尼崎市・伊丹市・豊中市・他・そして淡路島の市民の皆さん、関係機関・企業の皆さんには、苦難を超えて、街々を立派に蘇られることと確信します。

(代表取締役会長 みわ ひろし)

神戸の復興には活断層よりも地盤条件の考慮を！

中川 要之助

近代都市神戸の直下で生じた兵庫県南部地震は我が国が世界に誇る耐震性のビルや高速道路をもろくも崩壊させ、5300余の人命を奪った未曾有の阪神淡路大震災をもたらした。地震発生からはやひと月が経ち、震災に強い神戸の復興計画の策定が急がれている。一部の地震学者は今回の地震は六甲山の麓や神戸市街の地下に推定される活断層で生じたと考えている。このため復興計画では、活断層の存在を重視せよとの声が高く、活断層付近では土地利用を制限すべしとの極論さえ聞かれる。しかし活断層研究者の一人として、研究の現況を考えると、性急で短絡的な活断層上の土地利用規制は必ずしも震災対策に効果があるとは思われず、むしろまちづくりに混乱をまねき、規制をまねがれた地区ではより震災の危険性が増す恐れがあることを憂う。

専門家でも関心を持つ人が少なかった活断層分布図が巷間に流布し、活断層がいつか地震を起こすと著名な地震学者がまことしやかに宣託し、人心を不安にしている。活断層とは地質時代が最も新しい第四紀、約200万年前以後に活動の証拠がある断層を言う。活断層分布図では近畿地方の中央部に活断層が多く、とりわけ六甲山付近に多いのは、研究が詳しく行われているだけのことで、紀伊半島に比較的少ないのは、第四紀層の分布が少なく、活断層の研究も少ないためである。普段は近畿地方よりも地震が多い関東地方に活断層が少ないのは、堆積層が厚く、地下深部の岩盤の断層が地表に現れにくいからである。我が国の代表的活断層の中央構造線が諏訪湖付近で折れ曲がり、南東方向にJR中央線沿いに東京都の地下深部に達していることを、多

くの地質学者は知っている。その上には新宿の超高層ビルが林立している。日本列島全体が地球規模で最も地殻変動が活発な地帯にあり、日本中で1km四方に活断層が一本も存在しない場所はないと言っても過言ではない。要するに我が国では活断層を避けてのまちづくりは絵に書いた餅なのである。

今回の地震で淡路島西海岸の野島断層に変動が現れたことをグラフ誌が報道し、活断層の恐ろしさを訴えている。しかし写真を冷静に見ると断層は水田を一直線に断ち切っており、断層から1mも離れば、軟弱な水田土壌にさえ変形は見られない。断層が農家を横切る場所ではブロック塀は折れ曲がっているが、断層をわずかに離れた母屋は破壊をまぬがれている。西宮市で活断層がずれてマンションの地盤が崩壊したとの新聞を見て、早速出かけたが、地盤の変形は明らかに地滑りによるものであった。また神戸市役所の向かいで見られる活断層のずれは地下駐車場の陥没によるものだと地元の地質調査会社の技術者が電話してくれた。地震発生の当初より活断層が地震を生じたとの地震学者の思い込みが世間を巻き込み、激しい地震被害の原因を全て活断層に押しつけ、はては被害の激しい場所を結んで、活断層を引くなど非科学的なことさえ行われている。

活断層と地震の関係はともかく、地震と建物の倒壊との関係にはさまざまな要素が介在している。建物の構造、材質、施工技術などが今回の地震被害に大きく関わっていることは明白である。その中でも建物が立地する地盤の強度が最も深く関わっている。関東大震災では地盤の丈夫な山の手で比較的被害が少

なかったが、今回の地震でも地盤が丈夫な山麓地で被害が比較的少なく、軟弱地盤からなる海岸部の低地で被害が激しかった。このため海岸沿いに新たな活断層を引こうとする学者も出るほどである。また山麓地においても造成地の盛土で地盤破壊が生じ、これを活断層の証拠にあげている学者もいる。海岸部の旧市街地の被害に比べて、近年造成されたポートアイランドや六甲アイランドなどのより軟弱な海底地盤の上への埋立地の建物に被害が少なかったのは、最新の耐震設計とともに、地下深部の丈夫な地盤にまで建て込まれた基礎杭やサンドドレンなどの埋立地地盤の改良工事が役立ったことを物語っている。

活断層と地震の関係や市街地の地下の活断層所在についてはまだまだ研究段階で、土地の利用制限に関わるような詳細な情報が提供

出来るのは、遠い先のことである。一方、地盤の強度と地震の揺れとの関係は理論的に研究され、過去の地震でもかなり実証されている。これまでの地質調査の集積から我国の海岸部の大都市においては地盤強度の分布はすでに実用的な精度で把握されており、いくつかの都市で地盤図が刊行されている。神戸市においては地盤図は刊行されていないが、行政資料として地盤情報の集積は行われていると聞いている。また情報が不足している場所についても、新たに地盤調査を行うことは、活断層調査よりもはるかに容易である。一部の地震学者の魔女狩り的な活断層探しに惑わされることなく、実着に情報が集積されている。地盤条件に基づいた神戸の復興計画の策定が望まれる。

(同志社大学助教授 なかがわ ようのすけ)

復興を機にアイデンティティの再構築を

河内 厚郎

当初は「兵庫県南部地震」とよんでいたが、毎日新聞が用いた「阪神大震災」というネーミングが一般化した。私の住む西宮でも火の手があがったのに、町全体が崩壊しなかったのは、庭に樹木のある家が多かったからである。長田や兵庫はもっと大きな道路があったら燃えひろがらなかったのに、という専門家の声があったのには驚いた。昼間にあんな巨大地震がおこったら、往来では車に火がついて爆発騒ぎもおこり、アクション映画さながらになっていたに違いない。これを機に、物流優先の都市計画を強行されて、車がのさばる広い道路ばかり造られてはかなわない。もう、横倒しになったハイウェイは再建しなくてもよいではないか。もともと評判の悪い公害道路だ。そのかわり湾岸道路を二本にして関空とつないだほうが賢明であろう。神戸港

を機能させるために由緒ある阪神間の町々をふみにじられてはたまらない。もはや物流基地にすぎないというのに、人的交流の場ではないというのに、いつまでも「港」のアイデンティティにしがみついているから、こんな事態になっても神戸市は、まだ空の港まで欲しいとか言って、大阪から憎まれているのである。

それより、もっと我が街の魅力を磨く努力をすべきであろう。戦前、神戸に上陸した外国人は、平清盛の廟がある能福寺の兵庫大仏に詣でてから、神戸観光をはじめたという。しかし今はたまたま豪華客船が入港して市民があたたかく出迎えても、神戸には見せるべき歴史がないとばかり観光客を京都や奈良に直行させてしまう有り様だ。私は神戸市の職員が「神戸には歴史的な遺産がありませんから、

「ポートアイランドやワイン城を見てください」と真顔で言うのを聞いたことがある。ところが、外国の旅行ガイドブックには須磨寺や湊川神社、灘五郷や有馬温泉、阪急神戸線に点在する美術館などがちゃんと紹介されているのである。

神戸観光の目玉となった北野町の異人館にしても、市は当初再開発しなかったと聞いている。NHKの連続ドラマ『風見鶏』がなかったら、おそらく区画整理で団地のようなものになっていたのではないか。神戸市が観光行政に熱心だと錯覚されがちなのは、「神戸商法」が最初に注目されたポートピア博覧会のせいであろうが、北野町にみるような民間の文化ストックが注目を集めて神戸ブームがおこったときに、ちょうどポートピアが重なったため、神戸人気があたかも行政の手柄のように錯覚されてしまったという次第である。

歴史を切り捨て、安っぽいカタカナの造成地を作ることが「アーバン」だと信じてきた、神戸市の都市開発の手法によく市民が疑問を抱くようになったのは、六甲ライナーの

建設をめぐる紛糾した旧谷崎潤一郎邸（東灘区）の移築問題であった。昭和の源氏物語といわれる『細雪』の舞台と言えば、第一級の文化観光財である。しかしおそらく神戸市の職員は『細雪』など京都の話だくらいに思っていたのではなかろうか。東灘の人々がそうした行政のレベルに気づくのが遅れたのは、いくら何でも、まさかそんなひどいことはあるまい、と甘く見ていたからではなかろうか。

阪神間の市民は自分の手でまちづくりの礎となるようなアイデンティティを再構築しなければならない。そのためには、既成の行政区画によらぬ新しい枠組みが必要だ。

（文化担当顧問 かわうち あつろう）



荷松庵（旧谷崎潤一郎邸）

きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況

阪神・淡路地域の一日も早い復興を

杉原 五郎

大震災の傷跡

—これからがたいへんなんですよ—

阪神大震災が発生して12日目の土曜日、被災地の神戸に初めて足を踏み入れました。阪神の梅田駅に来ると、リュックとズック靴の人達で改札口周辺はごったがえし、青木駅を降りると、駅の周辺は倒れた家屋やガレキで覆われ、大震災の傷跡が生々しく残っていました。

私は、この日を含めて3日間、弁護士、医師、建築家、保険関係者などにまじって、専門家ボランティアの活動に参加しました。避

難所になっている小学校や中学校などを巡回し、被災者から被災状況を直接聞きながら、日を経るごとに被害の深刻さが広がりつつあることを実感しました。当面の復旧対策は少しずつ進みつつありますが、復興はまさにこれからといったところです。

自治体関係者のご苦労

—地震が発生してから5日間は完全徹夜でした—

大震災の直後は、事態の推移を見守るだけでした。2週目の終わり頃から仕事でおつきあいしている自治体関係者と連絡が取れるようになり、今回の大震災が自治体関係者にとっても逃げ場のない厳しい状況にあることがはっきりしてきました。



専門家によるボランティア活動

神戸市住宅局のN氏から、復興計画の支援をお願いしたいという緊急の電話が自宅に入ったのは、1月29日の日曜日の夕方でした。翌週の火曜日に打ち合わせのため神戸市役所に出向きましたが、ほとんど家にも帰らず市役所に泊まり込みの状況で、復興計画づくりの取り組みを始めた30代~40代の中堅職員の頑張りが印象に残りました。2月に入って、西宮市や伊丹市を尋ねて、地震による被災状況や被災者対応などについてお話を伺うことができました。西宮市では、被災後4週目に入って幾らか落ち着いてきましたが、新たな課題が次々として出てきて、市職員にも疲労が目立ち始めている、ということでした。

震災復興に向けたアルバックの対応

—専門的な立場からお役に立ちたい—

阪神大震災後1ヶ月が過ぎました。この間、私どもアルバックも、何かお役に立ちたい、という思いでじりじりとしてきました。今、復興関連の相談活動や計画策定の業務、各種の提言・提案活動などに対する要請が高まっています。また、建物の診断や住宅復興相談の活動に専門的ボランティアとして自発的に参加する所員も増えています。

このような状況の中でアルバックとしては、この度の震災復興に対して、シンクタンク、コンサルタント、建築設計の仕事をしている専門的な立場を生かして積極的に対応していきたいと考えています。「自治体関係者との

連携を密にすること」「現場からの発想を大切にすること」「人的つながりを最大限に活用すること」「ボランティアに参加可能な所員は専門的な相談活動などに積極的に参加すること」などに留意していきたいと思います。

阪神・淡路地域が災害に強く美しいまちに不死鳥の如く甦るよう、一日も早い復興を願わずにはおられません。

(大阪事務所 すぎはら ごろう)

<体験記>

震災体験からまちを考える

馬場 正哲

子供達と、御嶽山の大自然の中での初めてのスキーから帰宅したその未明、突然の轟音とともに爆発から飛行機の離発着のような激震に見舞われた。真っ赤な閃光がパシッと言う音とともに真っ暗闇となり、揺れがおさまった。一瞬のこと、今想えば、自然のなす行為ではあった。その朝、雀は帰り、武庫川の水鳥は何事もなく水辺で戯れていた。

連絡がとれない

宝塚の奥の碎石場跡の団地で、幸い家屋には被害はなく、早速足の踏み場もない家財の片付けに入った。

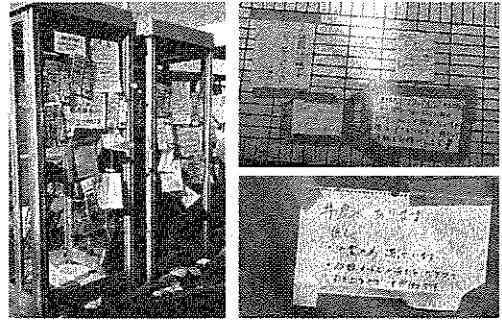
余震で、前の山や蓬萊峽が土煙とともに崩壊していく。直後の電話で、家は半壊だが無事と分かった芦屋の実家が気がかりだが、以後一切電話が通じない。午後3時電気が復旧、中国の青島にいる次兄と国際電話で連絡がとれた。青島経由でのやりとりで、父母が市内の次兄宅に避難したことを知り安堵した。

地縁より社縁・血縁

鉄道や国道 176号の渋滞で2日間家で孤立する。団地の被害の確認やテレビの中継ざんまいの日々である。団地の口コミでは、実しやかな情報や遠方の様子まで入ってくる。



住宅地の中、歩く人々の列



19日、阪急宝塚線の復旧で事務所に出社、その足で芦屋の実家の被害確認と救援物資を運ぶ。京橋で、思いつく食糧と水、衛生物資を買うが、妙に若いサラリーマンが大挙して仕入れていて、みるみる内に品物がなくなる。会社の指示で、手分けして被災社員宅に救援物資を運んでいるようだ。

阪急西宮北口から芦屋まで徒歩約1時間。既に西宮北口は戦後の梅田のような黒山の人で、ターミナルと化している。危険注意に混じって、伝言・チラシが至るところに張り出されつつあり、例の会社員群の待合い場所となっている。リュックやキャリアに満載した荷物を運ぶ会社員風が多い人々の列に従って歩く内に、震災の惨状が延々と続く。自分も被災者だという意識のせい、意外に冷静に歩ける。電柱の大阪の不動産業者の震災見舞いと物件案内を横目に、阪急夙川の高架橋の惨状、線下に崩れかかるビルなど思わず息をのむ。幼い頃遊んだ友人の家も惨憺たる様である。

リヤカーが欲しい

週末、とりあえず実家の貴重品の搬出に向かう。阪急梅田駅は大阪の中で被災地の出先の感を呈し、ボランティア団体の集結場所でもあり、大変な混乱状態である。西宮北口は、店も仮設で営業を始めるなど、活況を呈していた。ボランティアの活動も目立つ。被災家屋でも「無事」や「避難場所」のメモ、「水

あります」などコミュニケーションが始まっている。はや京都の「古道具買い受け」まで張り出され、この臭覚に敬服してしまう。

倒壊寸前の実家から、貴重品を運び出す。路地奥の我が家は、大正時代の四戸の建売りの一戸で、既に建替えた家もあり、それらは被害を免れた。東隣はいきなり屋根瓦が脱落したが、柱梁は無事で、シートをかぶせて住み続けておられる。わが家は、屋根が持って柱が持たなかった。しかし、倒壊は免れ父母を守った。荷物は市内の次兄宅と御影の長兄宅に収容することとしたが、車が手配できない。掛け軸を背負い、自転車でのピストンである。つくづく「リヤカー」と言うものがあれば便利だろうと思った。

無防備なまちを知る

芦屋の被害は惨憺たる状況だが、何故か個別的で、家財の持ち出しも、実に孤独な気分で進める。北隣に、地図を持った会社員が援助物資を届けて帰っていく。お隣に出会うと「大変でしたね」の会話だけで、お互い干渉を遠慮する。これも文化だが、これでよいのか。余りに無防備な状態と思わずにはいられない。

今年の年賀状の賛「天ノ時ハ地ノ利ニ如カズ。地ノ利ハ人ノ和ニ如カズ。(孟子)」を、身をもって知らされ、まちづくりの基本を指弾された思いがする。

(大阪事務所 ばば まさあき)

＜体験記＞
激震の灘区から日常の長尾まで
 馬詰 建

昨年の11月から、神戸市灘区六甲道駅前でマンションを購入し、結婚生活を始めていた。そして、震度7の激震を味わうはめになった。震災という非日常で感じた衝撃は、今、日常のなかで急速に薄れつつある。それらを記録しておく意味も含め、多少感傷的になるが紹介していきたいと思う。

その瞬間は、連休のスキーほけから翌日の専門委員会に備えるべく、熟睡していた。最初のドーンは記憶になく、意識がだんだんと戻っていく中で、振動が激しくなっていった。すぐに四つん這いになった。百貨店によくある子供用の乗り物のようにマンションが激しく揺れた。「うそやろ！なんでこんなにでかいもんがこんなに揺れんねん！」と思いながら、「もう絶対つぶれる・・・」と思った頃にやっとおさまった。どこからか水（ガス？）の吹き出す音が聞こえた。

直後にお互いの両親に電話をしたが、西宮の妻の両親にはつながらない。とりあえず外に出ようとしたが、ドアが歪んで開かず、思いつき蹴ってなんとか脱出。玄関上部の壁が崩れ、はりにもひびが入っている。外ではすでに多くの人が右往左往しており、顔から血を流している人もいる。六甲道駅舎は倒壊し、周辺の木造住宅は全滅に近い。前のビルは2階がなくなっている。とりあえず、空地で気を落ち着かせてから小学校へ向かうが、まだ何の拠点にもなっていない。「24時間は自力で切り抜けろ」というのは本当だと思う。少なくとも半日は何にも頼るものなどない。しばらくして、歩く人のラジオで淡路島が震源地であることを聞き、これが地震であること、日本全部がこんな状態ではないことを確

認した。頼る情報さえない。妻の両親が心配なので、2号線を歩いて西宮に向かう。

沿道の倒壊はひどく、道路は朝9時頃で、すでに渋滞、略奪されるスーパー等も見た。変わり果てた自分の住む町やどうみても人が埋まっている木造住宅等を延々と見るにつれ、ほんまに腹が立ち、むちゃくちゃ悲しかった。ヘリコプターは飛んでいるのに、誰も助けにこない。これまでの都市計画、建築活動がなくなり上げたものは、一瞬でなくなった。それとも、それらが間違っていたためにこうなったのだろうか。

西宮が近づくにつれ、最悪のケースを考えた。妻にはとても見せられないので先に見に行った。家の前で道を歩く妻の父親に会い、木造の家は倒壊したものの、両親の無事を確認し、4人で喜び合った。家の前が病院だったため、多くの死傷者が運び込まれていた。「手伝ってくれ！」と言われ、2人でわけもわからず運んだ。毛布がはがれると、土まみれの生き埋めになって亡くなった人だった。

その後、無事だった近くの知り合いの喫茶店に移動した。そこの夫婦は近くに身寄りはいないものの、たくさんの方が現れ、水などを分け合っていた。顔もろくに知らない私のマンションとはえらい違いだ。周辺に知り合いのいない人達は本当に不安だろう。われわれ4人とその夫婦は、出入口付近に集まり、余震におびえながら、夜を明かした。

次の日に阪神電車が甲子園まで動いたため、私たち2人は最低限の荷物を持って、枚方の実家へ避難することにした。

阪神電車に乗ったとたん、そこは日常に見えた。普通に着飾った人達が震災の話をし、環状線では女子学生がバレンタインチョコの話をしていた。学研都市線に乗った頃には、自分達だけがみずほらしいように感じた。横

では、もう六甲道に住めないと思った妻が泣いていた。私はこの地震をどう考えるのか、損壊したマンションの今後の事などを考えていた。私達が住みたかった神戸はなくなってしまった。これから、前よりもすばらしい神戸になるのだろうか。

(大阪事務所 うまづめ たけし)



私が通っていた六甲道駅は、柱が爆裂し、桁が落ちた。高架下に入っていた行きつけのパン屋もつぶれてしまった。

阪神大震災を機に地域計画コンサルタントのスタンスを考える

齋藤 侑男

はじめに

平成7年が明けて早々の17日、阪神大震災のニュースが日本中、いや世界中を駆けめぐった。

被害の状況・被災者の様子が報道されると同時に、行政の対応の遅れ、とりわけ政府の対応の遅れへの指弾の声には厳しいものがある。一方、地震予知や避難・防災対策、耐震構造などの専門家はテレビなどで、確信的な意見を展開していた。

被害に遭われた関係者には深くお見舞い申し上げたいと思うが、同時に、関東にあって、地域計画コンサルタントを業としている者としては、自分自身の基本スタンスの確認を迫られているように感じている。コンサルタントは、事実を的確に判断し計画化しなければならない職種ではあるが、たとえ正確に判断できない中でも対処を待つことのできな

い実務家であるという側面が強い。何に依拠して仕事を進めればよいのだろうか。

いくつかの住宅マスタープランづくりに関わって

東京事務所に移ってから現在までに、いくつかの住宅調査・基本計画づくりに関わらせてもらった。最初は品川区、その後、春日部市、戸田市と続いて現在進行形というところである。

品川区の住宅調査では、苦い思い出がある。今から5年前の2月、場所は今度の大地震の被災地の一角である真野地区・ハーバーランド等で、幹事会メンバーである大学の先生や国・公団に在席していた研究者たちに交じって、調査視察に参加していた。このときの調査の視点が定まらなかったのである。品川区の住宅白書づくりは自治体としてはわが国でも最も早い時期の調査であり、住宅会議の「住宅白書」をイメージしながら、品川区の立地条件から工業者・商業者・若年労働者といった多様な居住者像に焦点を当て、なんとなくポルターージュ風にとりまとめることを考えていた。その上での施策化というわけである。しかし、実務調査にタッチしない中で、幹事会参加という条件は、実務担当のコンサルタント会社の職員とも異なる立場であり、また、その他の幹事の先生方の明快なスタンスとも違っていた。個人的な勉強はさせてもらったが、コンサルタントとしては調査・計画に役立ったとはいえない結果におわってしまった。

翌年、埼玉県下、春日部市の住宅基本計画づくりに、今度は、直接の調査機関として関わることになった。埼玉県の住宅・宅地供給計画が先行して完成していたことから、供給計画というよりは住宅マスタープランにということで、福島大学の鈴木浩先生の教えを受

けながらのとりまとめである。一方では、市の担当者と一緒に市内全域を丁寧に見て回り、関係部局との調整協議を重ねながらのとりまとめでもあった。対象とする地域と、自治体としての役割・責任を果たし切ろうとする担当課長の思い入れ、そして、計画づくりに理想・理念を込めようとする学者・研究者の姿勢が、われわれ作業班であるコンサルタントのところで交錯していたように感じている。地域を持つこと、しかも自治体職員の熱意を通じて地域に関わることの力強さと安心感を今更ながらに実感したものである。

そして現在、同じく埼玉県下の戸田市の住宅マスタープランづくりのお手伝いをしている。今回も、担当の職員の方々と何度となく市内を見て回り、具体化できる計画づくりにむけて、関係部局との協議を重ねているところである。

こうして、白書、供給計画、マスタープランと厳密にはそれぞれに異なる性格ではあるが、基本的には「住宅基本計画」といってよい調査・計画に関わった。地域の居住者の顔と担当する自治体の行政計画としての目標像、それに向かっての研究者の到達点の結集が求められているところであるが、コンサルタントには、自治体職員でもなければ先生でもない、その結節点にいるという特別の役割があると感じている。

コンサルタントには、地域が生命線

阪神大震災の復興に向けて、いろんな場面と立場での努力が開始されている。地域計画に関わるコンサルタントについても、とりわけ神戸市に関わりの深いコンサルタント事務所などでは地震直後から不眠不休の活動が続けられていると聞いている。関係する自治体職員の苦勞も筆舌に尽くしがたい。疲労から命を失った方もいるという。未曾有の事態で

あるだけに、学者・研究者の理論を最大限に活用することも必要になっているだろう。

我々、他の地域コンサルタントが果たす役割は、まず第1に、阪神地域に根ざしたコンサルタントへの力の結集ということがあげられるだろう。同時に、これを契機に、自らの地域にもっと深くもっと強く関わっていける力量をつけていくことをこれまで以上に意識していくことを肝に命じていきたいと考えている。

(東京事務所 さいとう いくお)

集合住宅をリードする公営住宅 石本 幸良

災害時の応急住宅としての公営住宅

阪神大震災発生から一週間後に自分の目で状況を確認したく、神戸の街を訪れましたが、その被害のすさまじさに驚くばかりで、建築に携わる者として建物の安全性について問い詰められるような思いでした。

神戸の街の被害がある地域に集中している状況から、今回の地震が直下型で断層沿いに被害が集中したものと思われます。また、鉄筋コンクリート造がこれほどまでに被害を受けたこと、木造住宅では老朽化した屋根荷重の重い住宅に被害が集中していることなど、今回の地震の特徴を目の当たりにしました。

県の住宅建設課にお見舞いに行きました所、被害者でもある職員の方々が応急住宅の確保のために不眠不休の努力をされている姿を見て、頭の下がる思いでした。

この震災で約10万世帯もの方々が家を失い、住宅の確保が緊急の課題の中で、仮設住宅約2万戸の建設とともに、周辺で数千戸の公営住宅が確保され、隣接県でも2万戸の公営住宅の提供が可能な情報を耳にして災害時にお

ける公営住宅の重要な役割を再認識しました。これだけの住宅が確保されたことは管理上の問題も浮かび上がりますが、ある町では建替のために募集を停止していた住戸を改善して対応すると聞き、今回のような緊急時に万単位で即座に対応可能な住宅は公営住宅しかないと感じました。

集合住宅をリードする公営住宅

今回の地震で公営住宅でも大きな被害を受けておりますが、灘区で見た階段式の4階建て公営住宅は周辺の民間マンションが倒壊する中、ほとんど無傷で入居者の方や周辺の住民の方に与えた安心感はとても大きなものと思われます。

私が公営住宅の計画、設計に携わって10数年が経過しましたが、昭和40年代までは集合住宅としての「住宅」を供給することが目的でしたが、50年代に入り、居住空間としてだけでなく、集合住宅の新たなデザインの提案、周辺のまちづくりへの寄与の点で注目を浴びました。近年では農村部でも住宅水準の向上、まちの特性を活かしたデザインなどで地域の集合住宅をリードするとともに、地域のまちづくりの大きな役割を担っています。

居住水準の高い公営住宅

現在計画している公営住宅の住戸専用面積は約75㎡で、概ね3DKが主流で、民間であれば4LDK、5LDKと表示されそうな程の規模です。高齢化対応は標準仕様で、3ヶ所給湯の事例も増えています。さらには独立キッチンやカウンターキッチンの事例も見られるようになり、民間のような見た目の華麗さはないにしても住戸規模、設備、管理のしやすさなどの点でおそらく現在供給されている集合住宅の中では最も水準が高いのが公営住宅という時代となっています。

現在、木造公営住宅を中心に公営住宅再生

計画が実施されていますが、順次建て替えが進められていくと、おそらく公営住宅が住宅全般の水準を引き上げる役割を担うこととなるものと思われます。

公営住宅の今後の役割

これまで地方中核都市から地方の農村部まで市町村の公営住宅の計画、再生計画のお手伝いをしてきましたが、公営住宅はそれぞれの地域毎に大きく役割が異なってきました。

これまで公営住宅は住宅困窮者に対する施策住宅的な意味合いが強く示されていましたが、現在は様々な役割を担って公営住宅が建設されています。農村部では民間借家の供給が少なく、世帯分離する若年夫婦世帯の受け皿住宅としての重要な役割を担い、公営住宅の建設は町の重要な施策になっています。大都市周辺部では民間借家の供給も活発であり、選択の幅があるとはいえ、高い家賃と小規模な住戸規模で中堅勤労者に対して適切な住宅の供給が行われていない状況であり、幅広い公共賃貸住宅の供給に向けて特定優良賃



震災で周辺の共同住宅が倒壊する中、無傷の公営住宅（神戸市）



周田の景観を考慮した京都府営住宅「西天王町団地」

貸住宅の供給が行われています。

このように公営住宅の役割はその内容が充実する中で、様々な役割が付加され、地域の実情に応じた適切な公営住宅の供給が求められています。

再生計画を進めていると、どの町でも需要推計を求められますが、数千人程度の町で公営住宅だけの推計を行うにはデータ不足で正確な推計などできるはずがありません。そのような時には公営住宅の現状を説明し、地域産業の活性化につながり、若者定住施策と

しての住宅の供給の必要性等を説明させて頂いています。町の総合計画に対してあるべき住宅施策、そして公営住宅の持つ幅広い役割を考慮した政策としての公営住宅の供給の視点での計画の重要性を説明しています。

計画、設計している私自身がうらやましく思うほどの公営住宅が全国各地に建設されている現在、地域の個性をかし出し、地域の活性化につながるまちづくりとして今後も公営住宅の計画に従事できればと願っています。

(京都事務所 いしもと ゆきよし)

うまいもの通信⑩

省農薬みかんはいかが？

相楽 美穂

去年の夏は観測史上最も暑い夏となり、その被害が様々な形で発生しました。京大農薬ゼミが害虫の調査を続けている和歌山の省農薬みかん園も、その影響を受けてこれまでにないみかんが実りました。

まず、実が小さくて甘味の強いみかんが実りました。そして見た目がきれいで、農薬を使用したみかんとほとんど区別のつかない出来ばえでした。これらは、雨が少なかったためだそうで、見た目のよさについては、雨で媒介される「そうか病」の発生が少なかったためとのことです。

しかし、今回の異常気象により、これまで調査の対象にする必要もなかったミカンサビダニの被害が多発し、被害果はその表面が茶色に変色して皮が固くなり、味も落ちてしまいました。果実が幼いころに食害されると成長が止まり、食べられなくなるとのことです。幸い、被害果はみかん園全体の数%にとどまりましたが、農薬を使っていない園の中には全果実が被害にあったところもあるそうです。

今年も異常に暑い日になれば、また、サビ

ダニの被害が心配されます。もし、被害がひどくて食べられなければ、来年のみかんを期待して、なんらかの形でみかん園を応援したいと思っています。私はぜひ、日本の省農薬みかんを食べ続けたいと思います。

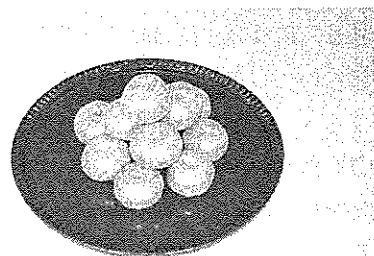
皆さんもいかがですか？

(大阪事務所 さがら みほ)

【農薬ゼミの紹介】

- ①今から25年前に農薬によって被害を受けた和歌山のみかん農家が、裁判を起こしたことがきっかけとなって、農家のあり方を様々な角度から議論してきた。省農薬みかん園での病虫害の調査は今年で16年目を迎えている。
- ②夏と秋に虫や病気の調査を行い、11月に収穫を手伝うのが例年の活動となっている。また、剪定や摘果のお手伝いをすることもある。
- ③毎週金曜日午後6時半から京大農学部の本・378教室で例会がある。学生以外の人も歓迎されます。

連絡先：大阪事務所 相楽 美穂



うまいもの通信⑰

お相撲さんの力の源“ちゃんこ鍋”

鮒子田 稔理

近年の相撲ブームでちゃんこ鍋の店も大はやりで皆さんも一度ならずお食べになったことがあると思いますが、ちゃんこ鍋とはそもそもなんだ？ちゃんこ鍋の定義っていったい・・・？と書いていらっしゃる方も実は多いのではないのでしょうか。ちゃんこの語源は二説あって、食事系の兄弟子一父ちゃん・おじちゃん一つくる食事の事とする説。支那鍋のチャンクォの訛ったものとする説がありますが、どちらも確証はなくて、要するにお相撲さんの食べるものは全て「ちゃんこ」と言っています。最近では従来のお鍋の他に焼き肉、スパゲティなんかメニューに取り入れられていてこれはこれで、立派なちゃんこと言えます。しかし、お相撲さんにとって、身体をつくることは重要な仕事で、その為には栄養バランスのよい食べ物をたくさんとらなければなりません。だから、あらゆる材料を一緒に煮込み、栄養満点で手軽なお鍋を中心とした食事をとっているのです。

具は白菜、人参、ごぼう、厚揚げ、蒟蒻、大根、葱、蕪などをざくざくと切って大鍋にぶち込みます。お相撲さんは土俵に手をつくという意味から、牛や豚など4本足のものを嫌い、専ら鳥肉や魚介類を使いますが、これも最近では、どの部屋でも牛や豚のはいったちゃんこになっているようです。味も鳥ガラスープだけでなく、日によって、みそ味や大根おろしを鍋にいれる雪鍋、キムチをいれたキムチ鍋などバラエティに富んでいて飽きのこない工夫がされています。

それでは、「ちゃんこ」を食べようと思ったらどうすれば良いか・・・まず、お相撲につ



いて自分なりに研究し、テレビで相撲を観て、取り組みについて1人でぶつぶつぶやいてみたり、思い切って奮発して本場所に出かけて行って熱気を味わったりした後、部屋や個人力士の後援会にはいるなり、後援会の人とお友達になって、相撲部屋に行き、朝6時頃から始まる稽古を何時間も黙ってじーっと見つめます。そして10時頃から時折そとちゃんこ番のつくる様子を伺いに行き、力士が稽古を終えて風呂に入ってやっと、我々ささやかな後援者と関取と親方はちゃんこの大鍋にありつくことができる訳です。我々が食べている間、幕下以下の取的さんはビールをついでくれたり、給仕をしながらも、きっと猛烈な空腹感と戦っているはずですよ。先輩力士達がすっかり食べ終わった後には鍋の中には具はあまり残っていませんが、そのスープには栄養が十分残っています。取的さん達は、ご飯にそのスープをかけて朝食抜きの朝からの稽古で限界状態になった空腹を満たします。そして、「いつか毎日毎日一番に具のたくさんはいったちゃんこを食べるぞ。」と心に誓い、その為には強くなって番付をあげるしかないんだと、また稽古に励むわけです。

2月下旬頃から大阪場所に向けて稽古をつんだ力士が続々と大阪入りして来ます。鬢付け油の匂い、雪駄のザァザァと言う音に春の訪れを感じます。

(大阪事務所 ふしだ みのり)

新刊旧刊書評紹介

上甲 晃 著

致知出版社

『志のみ持参』

紹介 阪井 暖子

本書は松下政経塾の塾頭の講演を本にしたものです。

“松下政経塾”イコール政治家養成所もしくは経営者育成というイメージが強く、なぜコンサルタントでこんな本を？という向きもあるかと思いますが、少なくとも私が本屋さんでこの本を手にとった時には単純に、何人もの若手の国会議員を輩出している政経塾への興味だけでした。しかしパラリと開いてみた頁に書かれていた次の言葉に“あ！”と思ひこの本に引きずり込まれてしまいました。

「日本人も感動を求めてさすらうだけではなくて、あなた方が感動を与えるような民族にならなければだめだ。あなた方の生きざまが人々に感動を与えるような生き方をしないと、あなた方が感動を求めて世界中を渡り歩いていく生き方をしているうちは、日本人は決して人に尊敬されない。」ミャンマーの有名なお坊さんの言葉だそうです。

あなたは毎日わくわく、ときどきしながら生きていますか？もちろん毎日感動の嵐の中で生きているのもまた疲れてしまうかもしれませんが、なんとなくつまらなく毎日を過ごしてしまっていないですか。少なくとも私は何処か日常とは別のところに感動を求めていたと思います。だから、この言葉を読んだ時ドキッとしました。

現在の日本人は物質的に豊かになったが感動がなくなった、感動を求めてさすらっている状態だといいます。感動はさすらって求めるのではなく日常の中で十分に得られる、またそういう日常を送ることこそが大切といいます。でも、どうしたらそうできるのかと悩んでしまいます。

政経塾では、毎朝掃除をするということが開塾以来の規則だそうです。掃除をするということは一見単純で簡単そうなことなのですが、寒い朝も眠い日も理屈抜きにやるということは結構大変で無駄

なことに思えます。しかしこれは理屈で説明できるものではない、実際にやっていく中で自分で自分なりにその意味をつかんでいくものなのだと思います。

経済成長重視の社会情勢の中で、とにかく効率主義に走り合理的に何でも処理することが良いことだという流れの結果、感動の薄い社会になってしまったのではないのでしょうか。また家族が崩壊してきているといいます。それも手間暇かけて家族の為に何かをやるということをしらず合理的に処理しようとしてしまっているからではないのでしょうか。

また平凡な日常の中で、理屈抜きに効率を無視しても人の為を考えて何かをする、抜こうと思えばいくらでも抜ける手間は取ってかける、そういったスタンスが大切なのだとこの本は思いださせてくれました。

社会に対し、人に対し自分に何ができるのかを考えることはコンサルタントとしても大切なのではないかと新米所員の私は考えました。

すんなりと読める本です。経営者の方だけでなく、どうぞ皆様もご一読下さい。

(東京事務所 さかい あつこ)



まちかど

アメリカ西海岸から
尾関 利勝

昨年秋に、アメリカ西海岸各地のウォーターフロント視察に行った折り、各地の街角でちょっと気になるショットを幾つか見かけましたので、その様子をご紹介します。

産業廃棄物かアートか

写真①は、サンディエゴ市内のサンタフェ駅（AMTRAC）前にある市内電車駅ビルの壁に設置されたコンテンポラリーなモニュメントです。一見すると屑鉄の固まりのように見え、異様な感じを持たれるかも知れません。

サンディエゴは、今アメリカズカップで有名ですが、元々は海軍に関係する航空機やミサイルなどの軍需産業のまちです。そのせいでしょうか、このアートは戦闘機やミサイルの古材を活用しているように類推しました。

このように見ると、一見奇異なコンテンポラリーアートが妙に地域に根づいたリアルなものに見えてきませんか？

人に優しい店

日本では、左利きの人は比較的少数派で、日常生活用具の使いこなしに不便を感じて

おられる方が多いと思います。

この写真②は、港のフェスティバルマーケットの元祖とも言われるサンフランシスコのピア39の中にある左利き専門のお店です。

欧米には、きっと左利きの人が多いのでしょうか。こんなお店の一つから、人に優しい社会のあり方を考えさせられます。ちなみに急いでいる途中で、商品の確認ができて居ません。近々、サンフランシスコに行かれる方が居られれば、是非お店の中を見て来て頂き、お知らせ下さい。

故郷への郷愁を描く壁画

ロサンゼルスのリトル・トウキョーは日系人の住む町とその再開発で知られています。

ここには異国で故郷を思い起こす仕掛けがたくさんあります。神明造りを思わせるようなタウンゲートのシンボルタワー、移民当時の写真をタイルに焼き付けたモニュメント、瓦屋根のショッピングモールや仏教寺院があり、アメリカ的な周囲の高層ビル群の中にあって、個々のデザインや素材に多少違和感はあるものの、何故か日本的な雰囲気を感じさせるから不思議です。

写真③は、リトル・トウキョーの南、仏教寺院の集まる近くにあるビルの壁画です。襖を開けた向こうに、観音様のような像を左右に控えた日本の国会議事堂風のタワーを焦点にパースペクティブに広がる空間が描かれ、



写真①：これでもアート
(サンディエゴ)



写真②：人に優しいお店
(サンフランシスコ、ピア39)

そこに向かうように多民族の子供が駆けていく姿と、これを見送る着物を着た少女の姿が描かれています。宗教的な印象が強調された絵から、日本的であることにはどこか違和感があるものの、日本への思いと多民族の融合を祈るような思いが感じられました。

今、KOBANがトレンドー

アメリカの大都市では、どこでも治安の確保が大きな都市問題になっています。そこで日本の交番システムが評価され、全米各地で交番の設置が流行のようになっていることを日本の新聞記事で読んでいました。

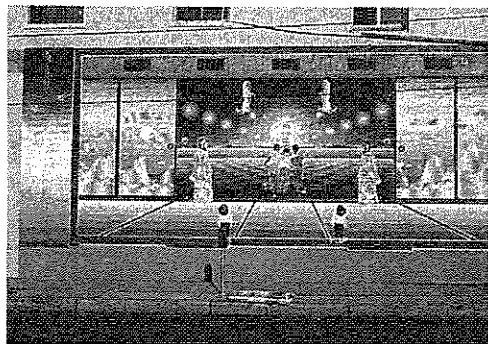
電話BOXかトイレのように見える写真④の建物は、サンフランシスコの中心部、ユニオンスクエアの中にある交番です。アップ写真⑤にKOBANと明示されています。

アメリカの公園や広場には、ホームレスのような人たちがたむろしていたり、スリや強盗などの犯罪もあって、市民には入りにくい場合が多く、こんな風に交番が設置されたのでしょう。思わぬ所で日本のシステムが評価されたようです。

(名古屋事務所 おぜき としかつ)



写真④



写真③：ジャパニーズ、ノスタルジー?
(07)池田、イトハトウォール 壁画)



写真⑤：KOBANは国際語
(サンフランシスコ、ユニオンスクエア)

アルパック (株)地域計画建築研究所

- 本社
- 京都事務所 〒600京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82・大和銀行京都ビル6F/TEL(075) 221-5132 FAX(075)256-1764
- 大阪事務所 〒540大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06) 942-5732 FAX(06)941-7478
- 名古屋事務所 〒460名古屋市中区丸の内3-18-30・ツボウチビル2F/TEL(052)962-1224 FAX(052)962-1225
- 東京事務所 〒160東京都新宿区新宿2-5-16・霞ビル401/TEL(03)3226-9130 FAX(03)3226-9560
- (株)九州地域計画研究所 〒810福岡市中央区天神1-15-1・日之出ビル6F/TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673
- (株)アルパックインターナショナル 〒540大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06)965-2012 FAX(06)965-2014
- (株)都市居住文化研究所 〒604京都市中京区東洞院通り六角上ル三文字町225・朝陽ビル4F/TEL(075)252-2231 FAX(075)252-4417